

台湾華語における文末の「～(的)説」

加納 巧
Takumi Kano

要旨

本論では、フィールドワークの結果から、台湾華語において文末に現れる「～(的)説」がおおよそ 50 歳を境に使用・認知率共に差が現れる事実を指摘する。そして、この文型が主に BBS を始めとするインターネット上のサービスを介して広まったことが、このような差異を生じさせた主要な原因であることを主張する。

キーワード：台湾華語、「～(的)説」、年齢層、BBS

0. はじめに

台湾で通用している中国語(以下台湾華語)には、「話す」という意味を表す動詞「説」が、「～(的)説」¹という形で文末に現れ、モダリティを表す助詞のような働きをしている例が見られる。この用法は、第一章で述べるように、台湾で用いられている閩方言の変種である台湾閩南語(以下、台湾語)からの影響で発生したものであると思われるが、台湾語の同様の表現と異なり、多くの台湾華語話者に、「～(的)説」は若者が使う表現であると考えられているようである。

「～(的)説」に関する研究には、Wang et. al. (2003)、于艷華 (2009) などがあるが、いずれも文法化やモダリティの面からこの現象を扱っている。しかし、社会言語学の面からこの問題を論じている研究は、管見の及ぶ限りでは見られない。

本論では、「～(的)説」の使用に関する調査を行い、その結果からこの現象が台湾華語話者の直感よりは高い年齢層でも用いられているが、おおよそ 50 歳を境に使用・認知共に明確な差が現れているという事実を指摘する。そして、この文型が特定の年齢層において主に使用される社会的要因を明らかにすることを試みる。

1. 台湾華語の「～(的)説」と台湾語の「～(e)講」

台湾華語の「説」は、主に「話す」という意味を表す動詞として用いられる²。

01) 他說他很忙。(彼はとても忙しいと言った)³

¹ ()中の「的」は省略されることもある。

² 実際の口語では、「説」よりも「講」のほうが多く用いられる。

しかし、「説」にはこの他にも、一見すると英語の関係代名詞のような働きをする用法が見られる。

- 02) 他告訴我(説)你頭痛。⁴ (彼は私に君が頭がいたいと言った) (Li and Thompson 1982(1981):602、中国語訳版 1983:423)

Li and Thompson (1982(1981))は、上例のように直接目的語が動詞句または節である形式の文を「間接談話 (indirect discourse)」と呼んでいる。

この他、Wang et. al. (2003)では、心的動詞や発話行為を表す動詞などの直後に現れる例も挙げられている。

- 03) 他跟我講說你不太舒服，所以我想說你大概不會來了。(彼が、君があまり気分が良くないと言っていたから、来ないんじゃないかと思っていたよ) (Wang et. al. 2003:462)

上例に見られる2つの「説」について、直前の動詞はそれぞれ「講」と「想」である。このうち、「講」は「説」と同じく「話す」という意味であり、もし「説」を動詞とみなすと、同じ意味の動詞が連続してしまう。また、「想」については希望・要望を表す助動詞とみなすと、後ろの節は「君は多分来ないだろうと言いたい」と意味になってしまい、前節とつながらない。また、「～だと思ふ」という意味の動詞と見て、「想」と「説」の両者とも動詞であると理解すると、「私は、君が来ないだろうと言うと思ふ」という意味になってしまい、よほど特殊なコンテキストを与えない限り成立不可能な文になってしまう。このことから、2つの「説」は、いずれも「話す」という意味を表しているのではなく、むしろ後続する節（「你不太舒服 (君があまり気分が良くない)」、「你大概不會來了 (おそらく来ないだろう)」)を導くマーカーとして機能しているとみなすべきであろう。

また、台湾華語の「説」には、上述のような用法の他に、以下に示すように文頭もしくは文末に現れる例が見られる。

- 04) 説他愛國，鬼才相信。(彼が国を愛しているなんて、誰が信じるんだい) (Wang et. al. 2003:459)
 05) 我覺得天體戰士不錯説。(私は『天体戦士サンレッド (筆者注：アニメのタイトル)』はいいと思いますよ)

Wang et. al. (2003)は、例 (04) や例 (06) に見られる文頭に現れる「説」を「伝聞」を表すマーカー (a marker of hearsay) と説明している。「伝聞」を表すマーカーは、もともと「聽說」、「據説」などがあるが、Wang et. al. (2003)ではこれらと「説」の違いについては説明していない。また Wang 等は、以下の例中の「説」は、「伝聞」だけでなく、「反期待 (counter expectation)」のニュアンスも表していると説明しているが、例中の「説」を「聽說」に換えても、文意だけでなく「反期待」のニュアンスも変わらない。

³ 出典のないものは、すべて筆者が MSN、Facebook でのやりとり、および実際の会話などから収集した例文である。以下同。

⁴ この例文の漢字表記は中国語版によった。

このことから、この文における「反期待」のニュアンスは、「説」が表しているのではなく、一連の会話の流れから語用論的に生じたものであると考えられる。

- 06) A: 最近我常熬夜耶, 豆豆都出來了, 怎麼辦呢? (最近夜更かしばかりで吹き出物が出てきたんだけど、どうしよう)
 B: SK-II 啊。(SK-II でしょ)
 A: SK-II, 説每天只睡一個小時, 你相信嗎? (SK-II って、(SK-II を使えば) 毎日 1 時間睡眠でいって、信じられる?) (Wang et. al. 2003:470)

さらに、この用法は使用頻度が低く、Wang et. al. (2003)の調査では BBS および実際の会話で得られた「説」を用いた文 286 例のうち、文頭に現れる例は 10 例、全体の約 3.5% にすぎず、さらに筆者が行った予備調査でも十分な例が得られなかった。よって、本論では文頭に現れる「説」は議論の対象に含めない。

次に、以下の例に見られる文末の「説」について、Wang et. al. (2003)では、それぞれ「反期待」(例(07)) および「強調」(例(08)) を表すと説明している。

- 07) (中学校で、教育実習生と学生が面談している)
 老師有跟你的導師有稍微談了一下。導師很關心你說。(先生、君の担任と少し話したんだ。担任の先生は君のことをとても気にかけているよ) (Wang et. al. 2003:476)
 08) B: ...他上得真的很有内容。(あの先生の授業本当にためになるよ)
 A: ...其實我好想去旁聽說。(実はわたしは聴講に行きたいと思ってるんだよ)
 (同上)

この他、筆者が収集した例の中に、会話の冒頭や、話題が切り替わった時に「説」が用いられている例が見られた。

- 09) 老師, 我們 1/16 要去墾丁泡溫泉説。(先生、わたしたち 1 月 16 日に墾丁 (台湾南部のリゾート地) の温泉に行くんですよ)
 10) (我們) 剛剛去學校看星星説。(私たちさっき学校へ星を見に行ってたんですよ)

上記 2 例における「説」の用法は、前の会話の内容を受けていないという点において Wang et. al. (2003)に示されている用法とは異なる。また、これらの発話において表されている内容 (墾丁の温泉に行くこと、学校に星を見に行ったこと) は、話し手が話題として提供したいと思っている情報である。しかし、話者は聞き手がこれらについての情報、認識がないことを知っており、発話内容を認識させるために用いられたものである。この用法は、山田 (2006) に示される、日本語の終助詞「よ」における「認識要求」の用法に極めて似ている。よって、本論ではこの用法を「認識要求」の用法と呼ぶこととする⁵。

⁵ 「～(的)説」の「認識要求」の用法については、稿を改めて、日本語の終助詞「よ」と対照しつつ明らかにしていきたい。

実は、台湾華語に見られる上述の用法と同様の現象が、台湾語にも見られる⁶。

台湾語では、「話す」という意味を表す動詞に「講」が用いられる。Chang (1998)では、「講」の関係代名詞としての用法、文頭に現れる用法および文末に現れる用法のいずれも挙げられている。また、「講」が文末に現れる場合、台湾華語の場合と同様、「講」の直前に台湾華語の「的」に相当する構造助詞の「e⁷」を伴うこともある（以後この形式を「～(e)講」と表記する）。

11) A: 伊日語講及真好。(彼は日本語がほんとうに上手だね)

B: 伊對日本回來的講。(彼は日本から帰ってきたんだよ) (Chang1998:p. 115)

台湾において国語教育（華語同化政策）が打ち出されたのは、日本が敗戦し、中華民国政府に接收された1945年からである（中川仁 2009）。それ以前は閩南系の住民は台湾語を、客家系の住民は客家語を主に用いていたと考えられるが、人口比率では、閩南系の住民が圧倒的に多く、台湾語は台湾における主たる言語であったと言える。台湾の1992年時点での外省人、閩南人、客家人、先住民の人口比率は、それぞれ13%、73.3%、12%、1.7%と閩南人が圧倒的に多い（黄宣範 1993:424）。また、現在でも、買い物や隣人同士の会話などでは台湾語が用いられることが多く⁸、ノンオフィシャルなコンテキストでは、台湾語も台湾における優勢言語の一つであるとみなすことができる。加えて、中国の共通言語である「漢語普通話」には、台湾語の「～(e)講」に相当する表現はみられない。このことから、台湾華語「～(的)説」は台湾語の「～(e)講」から転移したものであると考えられる。

2. 調査および方法

台湾語および台湾華語の「～(的)説」の使用状況について、筆者は、2012年2月～5月にかけて、苗栗県頭份鎮、台中市および屏東県屏東市においてアンケート用紙を用いた調査を行った。フェイスシートでは、性別・年齢・学歴・家庭内で主に使用する言語・自宅周辺のコミュニティで主に使用する言語などについて記入を求めた。調査対象者の人数および内訳は表1のとおりである。

表1 調査対象者の内訳

(単位：人)

性別/年齢	20以下	21～30	31～40	41～50	51以上	合計
男性	11	11	9	6	8	45
女性	9	17	11	9	9	55
合計	20	28	20	15	17	100

⁶ 比較的新しい用法と考えられる「認識要求」の用法を除く。

⁷ 相当する文字がないため、台湾では注音字母の「ㄜ」を当てることもあるが、本論ではローマ字表記を用いる。

⁸ 筆者の居住している屏東市では、この傾向が顕著で、住民同士の会話はほとんど台湾語で行われている。

また、調査対象者の家庭内の言語、および自宅周辺の言語環境は以下のとおりである。

表2 調査対象者の言語環境 (家庭内/自宅周辺)

(単位：人)

年齢層／言語	台湾華語	台湾語	客家語	その他
20歳以下	17/17	4/3	0/2	0/0
21～30歳	13/12	15/15	3/3	1/1
31～40歳	14/18	13/8	2/3	0/0
41～50歳	6/9	12/11	2/1	0/0
51歳以上	7/8	15/16	3/4	0/0

(複数回答した者もいたため、対象者の合計とは一致しない)

表2では、20歳以下と20～30歳代の半数以上が言語環境に台湾語を選択していない。これは、質問に「最もよく使う言語はどれか」という聞き方をしたために複数回答しなかった可能性がある。第3章の調査結果を見る限りにおいては、実際にはこれらの年齢層でも実際はもう少し台湾語との接触率は高いものと思われる。

アンケートの設問は、台湾閩南語の「～(e)講」に関するもの3問、台湾華語の「～(的)説」に関するもの6問を用意した。そして、各設問に対し「A. 使う、B. 聞いたことはあるが自分では使わない、C. 聞いたことがない⁹⁾」の三者択一で回答してもらった。なお、台湾語については、表記法がいくつかあるものの、いずれも一般に普及しているとは言いがたく、漢字表記についても文字で表せないものが多くあり、例文を読んで判断してもらうことが極めて困難である。よって、国立屏東科技大学の学生二人に例文を読んでもらい、録音したものを調査対象者に聞いてもらって判断してもらった。

今回のアンケートで用いた文とその日本語訳を以下の表2に示す。なお、台湾語パートについては、質問3の「緊做講 (早くしなさい)」を除き、台湾華語で表記した。

表3 アンケートの質問内容

台語部分 (台湾語パート)：(聽完錄音後，請在符合您情況上的選項上打✓(錄音を聞いた後で、あなたの状況に合う選択肢に✓をつけてください))

- A: 他日語講得真好。(彼は日本語がほんとうに上手だね)
B: 他從日本回來的說。(彼は日本から帰ってきたんだよ)
- A: 老鼠很討厭，它愛偷吃人家的蛋糕... (ネズミって嫌だね、よく人のケーキをこっそり食べてしまう...)
B: 被關過的老鼠都變得很溫順說... (でも捕まったネズミはとてもおとなしくなるよ...)
- (小孩子正在看電視，爸爸(A)、媽媽(B)要讓他去做功課 (子供がテレビを見ている。お父さん(A)とお母さん(B)は宿題をさせようとしている))
A: 緊做講！ (早くしなさい)
B: 緊做講！還在那邊看電視！ (早くしなさい、何まだテレビを見ているの！)

⁹⁾ ただし、質問9については、メッセージャソフト上でのやりとりを例として挙げたため、「從未聽(看)過 (聞いたこと (見たこと) がない)」と表記した。

國語部分（台湾華語パート）：

4. (TA 在跟一個學生談話。學生以為導師不怎麼關心他 (ティーチングアシスタントが学生と話をしている。学生は担任が彼に関心を払っていないと思っている))
 我有跟你的導師稍微談了一下。導師很關心你說。(先生、君の担任と少し話したんだ。担任の先生は君のことをとても気にかけているよ)
5. A: (那位老師的課) 我也可以去旁聽嗎... (あの先生の授業、私も聴講に行ってもいいかなあ...)
 B: 旁聽可以吧。我還一直去日文 2 旁聽的說。(聴講なら大丈夫でしょう。私もずっと日本語 (二) を聴講してたよ。)
6. A: 那位老師的課很有趣，而且很有內容。(あの先生の授業本当に面白いし、ためになるよ)
 B: 其實我也很想去旁聽說... (実はわたしは聴講に行きたいと思ってるんだよ)
7. (電視節目中的旁白 (テレビ番組のナレーション))
 這裡整個設計都是走科技感的 FEEL 說! (ここ (記者注: 紹介しているホテルの部屋) のデザインはとっても科学っぽい雰囲気がしますね)
8. 老師，我們 1 月 16 號去墾丁泡溫泉說。(先生、わたしたち 1 月 16 日に墾丁 (台湾南部のリゾート地) の温泉に行くんですよ)
9. (在 MSN 上 (MSN (マイクロソフト Windows Live Messenger) でのやりとり))
 A: 老師，您還沒有睡? (先生、まだ寝てないんですか)
 B: 還在寫 e-mail... (メール書いてるんだ...)
 A: (我們) 剛剛去學校看星星說。(私たちさっき学校へ星を見に行ってたんですよ)

3. 調査の結果及び分析

各質問に対する年齢層ごとの回答の割合をグラフ化し、以下に示す。

3-1. 台湾語パート

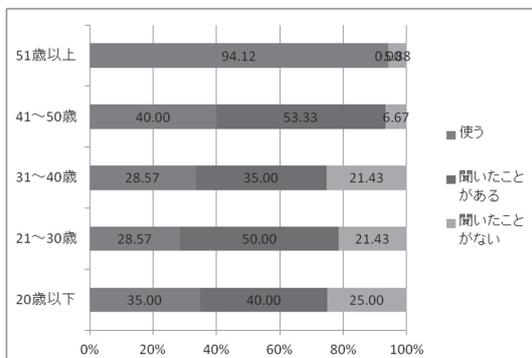


図1 質問1の回答の割合

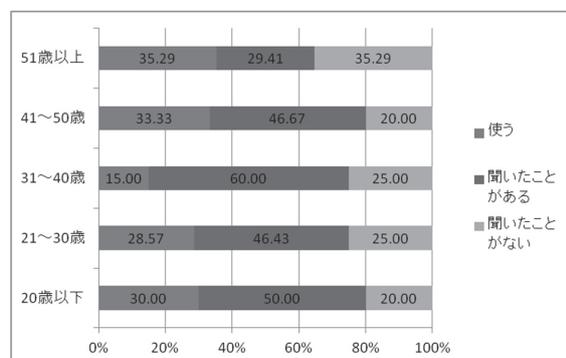


図2 質問2の回答の割合

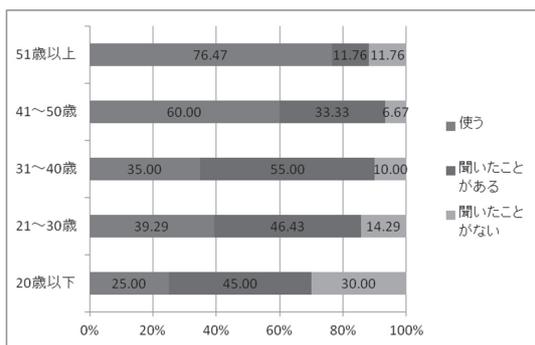


図3 質問3の回答の割合

質問1から3までは台湾語の「～(e)講」の使用に関する質問である。質問1と2はいずれも「反期待」の用法で、質問3は強調の用法である。質問2の51歳以上を除き¹⁰、いずれの質問も「使う」と「聞いたことがある」を合わせると70%を超える。このことから、台湾語の「～(e)講」は年齢層にかかわらず使用、認知されていることがわかる。

3-2. 台湾華語パート

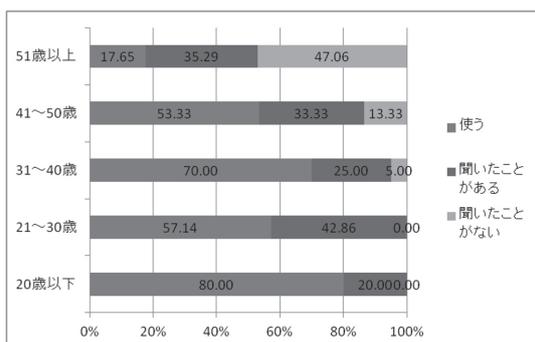


図4 質問4の回答の割合

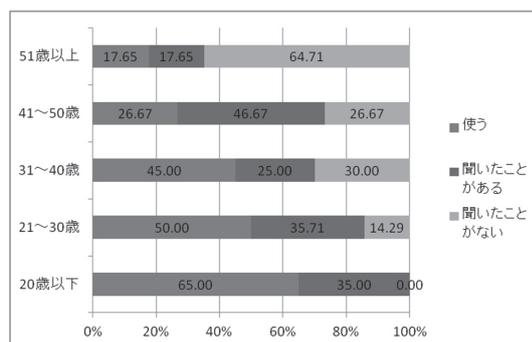


図5 質問5の回答の割合

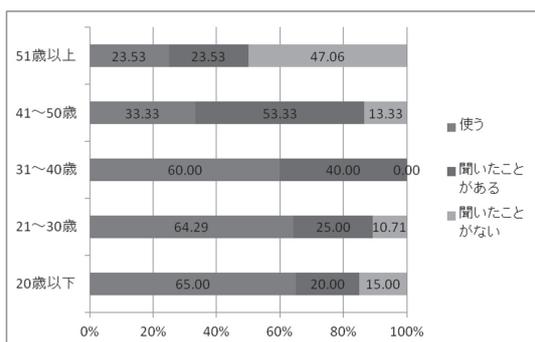


図6 質問6の回答の割合

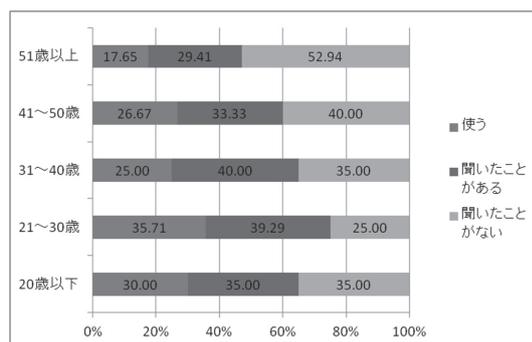


図7 質問7の回答の割合

¹⁰ これは、質問の文中の話題が普段の会話に上りにくい内容である可能性があり、それがアンケートの結果に影響与えてしまったことが原因と考えられる。

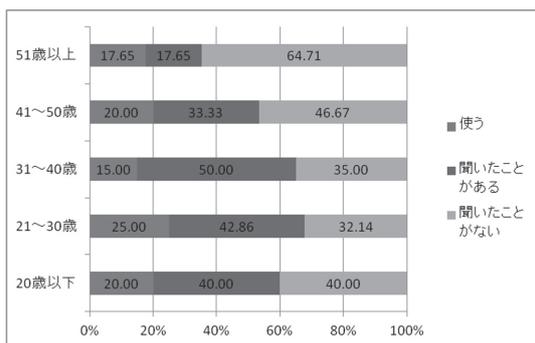


図8 質問8の回答の割合

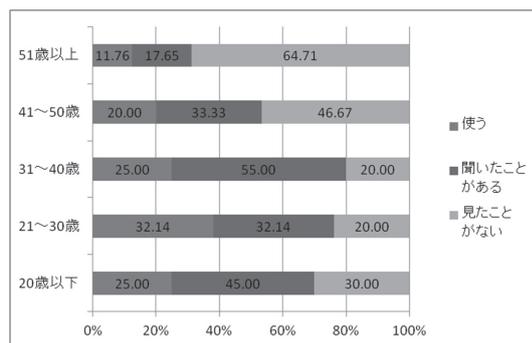


図9 質問9の回答の割合

質問4から9までは台湾華語の「～(的)説」の使用に関する質問である。質問4と5は「反期待」の用法、質問6と7は強調の用法、そして質問8と9は認識要求の用法である。いずれの質問でも51歳以上で「聞いたことがない」の割合が急に高くなる。また、年齢が高くなるに連れて、「使う」の割合が減り、かわりに「聞いたことがある」割合が増えるという傾向が見られる。このことは「～(的)説」が若い年齢層で主に用いられていることを意味しているものと思われる。

質問7～9にかけては、若い年齢層でも「聞いたことがない」の割合が比較的高い。これは、質問7はテレビ番組のナレーションであり、画面を見ることに集中し、ナレーションでこのような表現が使われていることに注意が及んでいない可能性がある。また、質問8と9の「認識要求」の用法はWang et.al.(2003)でも言及されていないことから、かなり新しい表現であると思われる。そのため、この表現が若い年齢層でもまだ全体的に浸透していないことが原因となっていると思われる。

4. 「～(的)説」形成の要因

本論で示した調査の結果から、台湾華語の「～(的)説」は50歳を境に使用率・認識率共に差異が生じることが明らかになった。これに対し、台湾語の「～(e)講」は、若い年齢層で使用率、認知率共に低かったが、「～(的)説」ほど顕著な差は見られなかった。「～(的)説」が台湾語の「～(e)講」から台湾華語に移ったのであろうことは間違いのないであろうが、もし「～(的)説」が単純に「～(e)講」から来たのであれば、「～(的)説」の使用に年齢層による差異が見られる事実が説明できない。よって、「～(的)説」の形成には何か別の要因を求めなければならない。

ここで筆者は、「～(的)説」はインターネット、特にBBS（電子掲示板）などのインターネット上の掲示板を媒介にして広まった比較的新しい表現であり、そのためBBSなどを多く用いる層とそうでない層の間に差が見られるようになったのではないかと考える¹¹。

台湾では、「批踢踢實業坊¹²」、「twbbs.org¹³」、1990年代後半に多くのBBSサイトが開

¹¹ Wang et.al.(2003)は、BBS中のやり取りを主な例として挙げている。また、于艷華(2009)も「～(的)説」をインターネット上で見られる表現とみなしている。

¹² <http://www.ptt.cc/>、1995年開設。

¹³ <http://twbbs.org/>、1998年開設。

設された。当時 BBS サイトの多くは大学内のサーバーに置かれたことから、BBS のユーザーの多くは大学生であったことが伺える¹⁴。

BBS や SNS (ソーシャル・ネットワーキング・サービス) では、記事の書き込み、閲覧のほか、記事に対してコメントを付けることができ、これを利用することで情報交換、会話、議論などを行うことができる。

BBS や SNS 上でのやり取りは、文字で行われること、相手がネット上にいるかどうかにかかわらず発言を行うことが可能であるなどの点で、実際の会話とは異なる。しかし、その文体は書き言葉よりむしろ実際の会話に近いものが用いられることが多い。

文字のみで会話(議論)では、自身の感情¹⁵を表す場合、イントネーションや語尾の強弱などの音声上の調整はもちろん、身振り手振りなどの非言語的手段も使えない。そのため、「反期待」や「認識要求」などの「感情(情報)」等も終助詞¹⁶などを用い、文字で表す必要がある。

ところが、台湾華語には「反期待」や「認識要求」などを表す専用の終助詞がない(山田京子 2006)。そのため、これらの情報を加えるために台湾語の「～(e)講」を「～(的)説」という華語に適した形に変えた上で使用し、それが広く普及したのではないかと考える。そして、「～(的)説」は、形式上は「～(e)講」を借用したものであることから、次第に実際の会話にまでその用法を拡張していったのではないだろうか。

ただし、BBS などが普及し始めたのは 1990 年代後半であり、まだ 20 年弱しか経っていない。そのため、「～(的)説」はまだすべての年齢層、とくに年齢の高い層に用いられるにはいたっておらず、そのためこの用法は年齢の高い層の人からは「若い人が使う」と認識されているに至ったと考えられる。

5. 最後に

台湾華語の文末に現れる「～(的)説」について、従来より台湾華語話者からは「若者言葉」と見なされてきたが、今回行ったフィールドワークの結果から、「～(的)説」の使用と認知は、およそ 50 歳を境に差が見られることが明らかになった。

「～(的)説」の使用と認知にこのような差が見られるのは、「～(的)説」がインターネット、特に BBS や SNS などでのやりとりで広く用いられるようになったからである。

インターネットが普及し、BBS が開設され始めたのは 1990 年代後半であり、まだ 20 年弱しか経っていない。その当時大学生であった人たちのほとんどが、現在 30～40 歳代であることを考えると、調査の結果は、これらの人々が大学卒業後も継続して「～(的)説」を使用していることを示唆していると言える。

41～50 歳代の使用率と認知率が高いのは、インターネットが普及し始めた時、20 歳代半ばだった人が、現在 40 歳代前半に入っていることが原因と思われる。この年代をさらに細かく分ければ、使用・認知の境がもう少し下がるかもしれない。

¹⁴ 現在では BBS 以外にも、Facebook や Google+等の SNS や、Windows Live Messenger、Yahoo Messenger などのチャット用ソフトも広く用いられている。

¹⁵ ここで言うところの「感情」は、喜怒哀楽だけでなく、「同意」や「意外」などのモーダルな情報も含む。

¹⁶ 台湾華語を含む、いわゆる「中国語」では「語氣助詞」がこれに相当する。

「～(的)説」は、形式上は台湾語の「～(e)講」を台湾華語に適した形式に置き換えているだけであり、多くの台湾人にとっては馴染みのある形式であり、抵抗なく受け入れられると思われる。「～(的)説」がインターネット上だけでなく、会話でも用いられているのはこのためである。

このことから、「～(的)説」は現在主に使用している年代の人々がこれかも継続して使用していくことが予想され、最終的には台湾語の「～(e)講」のように、年齢を問わず用いられる、台湾華語の一文法形式として定着することが予想される。

参考文献

- Wang, Yu-Fang, Katz, Aya, Chen, Chih-Hua 2003. Thinking as saying: *shuo* ('say') in Taiwan Mandarin conversation and BBS talk. *Language Sciences* 25. pp. 457-488.
- Chang, Miao-Hsia 1998. The discourse Functions of Taiwanese Kong in Relation to Its Grammaticalization. In: Huang, Shanfan (Ed.), *Selected Papers from the Second International Symposium on Languages in Taiwan*. The Crane Publishing Co., pp. 111-128.
- 黄宣範 1992. 『語言、社會與族群意識——台灣語言社會學研究』, 台北: 文鶴出版社
- L, Charles N., Thompson Sandra 1982(1981). *Mandarin Chinese: a Functional Reference Grammar*. The Crane Publishing Co. (中国語版: Li & Thompson 著, 黄宣範翻譯 1983. 『漢語語法』, 台北: 文鶴出版社)
- 中川仁 2009. 『戦後台湾の言語政策——北京語同化政策と多言語主義』, 東京: 東方書店。
- 山田京子 2006. 「中国語母語話者の終助詞「よ」の運用に関する問題点—「よ」と対応する中国語表現との対照研究から—」, 『早稲田大学日本語教育研究 8号』, pp. 123-135。
- 于艷華 2009. 網絡語言“X+的説”句法現象探究, 《遼東學院學報》(社會科學版) 第11卷第3期, pp. 79 - 81, 95。